

令和 6 年 6 月 2 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00450

研究課題名(和文) 新聞・雑誌を通して1800年前後のドイツ文学の公共圏への関与を明らかにする試み

研究課題名(英文) An Attempt to Clarify Engagement with the Public Sphere in German Literature around 1800 through Newspapers and Magazines

研究代表者

亀井 一 (Kamei, Hajime)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：00242793

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：ドイツ市民社会の成立期において、新聞・雑誌が公論の生成にどのように関わっていたのかを、ラファーター＝メンデルスゾーン論争(1769-1770)、汎神論論争(1785)を調査することによって明らかにした。さらに、ジャン・パウル・フリードリヒ・リヒターの小説『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』(1809/1822)をメディア論的に分析することによって、新聞・雑誌の形式、内容が作者の創作活動に深く関わっていることを明らかにした。作者の読者への呼びかけが、ストーリーの展開からの脱線を繰り返すリヒターの小説の契機となっている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

18世紀後半のドイツは、市民社会のあり方が模索された時代にあたる。新聞・雑誌による知識・情報の伝達が公論の形成に大きな役割を果たした。SNSを媒体とする匿名ニュースが飛び交う現代社会とは状況が違うが、メディアの可能性と限界がこの時点ですでに明確に示されていることが明らかになった。また、文学テクストを書物というメディアから切り離して考察することによって、時事的な側面に光をあてることができた。研究最終年度になって知ったことだが、ドイツではジャーナル文学研究プロジェクトとして、本の形式をとらない文学の研究が進められている。本研究もこのテーマに連なるとみなすことができる。

研究成果の概要(英文)：This research elucidated how newspapers and magazines were involved in the generation of public opinion during the formative period of German civil society by examining the Lavater-Mendelssohn controversy (1769-1770) and the Pantheism controversy (1785). Furthermore, by conducting a media analysis of Jean Paul Friedrich Richter's novel "Dr. Katzenberger's Journey to the Spa" (1809/1822) it revealed that the form and content of newspapers and magazines had deeply influenced the author's creative activities. The author's appeals to the readers served as a catalyst for the repeated digressions from the story's progression that characterize Richter's novels.

研究分野：ドイツ文学

キーワード：メディア論 一般ドイツ文庫 ラファーター＝メンデルスゾーン論争 汎神論論争 一般文学新聞 ジ
 ャン・パウル・フリードリヒ・リヒター 『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』 公共性研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

18世紀ドイツ啓蒙主義時代において、新聞・雑誌が教養市民の形成に大きな役割を果たしたことについては、たとえば、Wolfgang Martens (1971) による『道徳週刊誌』についての研究、Rolf Engelsing (1974) の読書・読者論が明らかにしたことだった。このような社会学的な研究はメディア論に引き継がれた。Albrecht Koschorke (1999) は、1800年前後の生理学研究における神経系モデルの確立に併行する現象として、書籍＝情報の流通を捉え、換喩関係と比喩関係の軸に沿って、生理現象と感性、自然科学と芸術を横断的に論じている。まさにこの時代に分化、専門化しつつあった諸分野を、情報社会の成立の諸局面という形で統合的に捉えたという点で、コショルケ論文は示唆的である。

しかし、特に18世紀の新聞・雑誌には、情報流通という観点から把握できない側面がある。第一に、この時代の新聞・雑誌は、書評 (Rezension) という形式を駆使して、一種の百科事典的な機能を担っていた。神学、哲学から、自然科学、芸術、文学まで、ほぼ網羅的に、論文、作品が収集、評価、分類され、同時代のディスクールの中に位置づけられている。第二に、情報という観点をとるかぎり、文学の美的な作用が視野に入っていない。しかし、文学的想像力を知の体系の中でどのように位置づけるのかは、この時代のテーマだった。

Oscar Fambach の『ドイツ批評の一世紀』(1957-63)は、まさにこの時代の書評の集大成（第一巻と第六巻は未完に終わったが）というべき業績だが、おおよそ文学史的な時代区分に沿って編集されており、同時代の知の体系という観点はみられない。

2. 研究の目的

1800年前後のドイツの新聞・雑誌記事の調査・分析、ノヴァーリスの百科全書構想、ジャン・パウル・フリードリヒ・リヒターの『抜き書き帳』、諷刺テクストをめぐる考察を通して、a) 知と文学の関係、b) 新聞・雑誌の変質を明らかにし、この二つの観点から、新聞・雑誌とともに文学が、同時代の公共圏形成に深く関与していたことを示す。

3. 研究の方法

インターネット上のアーカイブを一次資料として使用する。近年、急速に進められてきた古書のデジタル化が本研究の成立条件の一つになっている。

一次資料として取り上げる新聞・雑誌は、以下に挙げる四紙である。

A) 『一般ドイツ文庫』 (Allgemeine deutsche Bibliothek =ADB: 1765-94, Neue allgemeine deutsche Bibliothek =NADB: 1793-1806)

<http://ds.ub.uni-bielefeld.de/viewer/toc/2002572/0/>

B) 『一般文学新聞』 (Allgemeine Literatur-Zeitung =ALZ: 1785-1845, Jenaische allgemeine Literatur-Zeitung =JALZ: 1804-1841)

http://zs.thulb.uni-jena.de/receive/jportal_jpjournal_00000005

C) 『アテネウム』 (Athenaeum: 1798-1800) リプリント版を使用

D) 『朝刊新聞』 (Morgenblatt für gebildete Stände =Morgenblatt: 1807-36, Morgenblatt für gebildete Leser: 1837-65) 本務校所蔵のマイクロフィッシュ版を使用

当初計画では、1765年から1767年（リヒターの『抜き書き帳』との関連）、1774年から1776年（ゲーテ『若きウェルテルの悩み』受容）、1798年（『アテネウム』発刊）といったように、特定の時期における新聞・雑誌比較を予定していたが、資料の整理が難しかったため、ラファーター＝メンデルスゾーン論争、スピノザ論争に焦点をあてて新聞・雑誌の役割を調査した。

文学と知、公共性への関与についての研究は、リヒターの『抜き書き帳』と晩年の作品、さらに、『アテネウム』を中心とするドイツ・ロマン派の調査が軸になる。

4. 研究成果

(1) 1769年に起きたラファーター＝メンデルスゾーン論争の関連で、『一般ドイツ文庫』の果たした役割と、同時代の公衆について調査した。ラファーター＝メンデルスゾーン論争では、ユダヤ人啓蒙主義者メンデルスゾーンの改宗の是非が争点になったのだが、その発端は、ラファーターがシャルル・ボネ『転生論』ドイツ語訳につけたメンデルスゾーンへの献辞だった。魂の不死について、ボネとメンデルスゾーンの见解にそれほどの違いはない。論争は当事者の意図を超えて公衆の間で加熱していった。そのような状況の中で、『一般ドイツ文庫』は、公衆に対して議論の規範を示そうとしたのだった。『ドイツ一般文庫』(13巻2号)の評者は、寛容という啓蒙主義的立場から事態の収拾を目指した。また、論争とは別立てでボネ『転生論』を論じた。それはしかしとりもなおさず、当時の公衆が規範を必要とするほど偏見にとらわれていたということでもある。ユダヤ人に対する偏見、千年王国的な期待といった反啓蒙的な議論が根深く残っていたことを記事から読み取るのは難しくない。カントは、1784年『啓蒙とは何か』におい

て、啓蒙を、社会的な地位を離れた自由な人々による議論に基礎づけた。しかし、議論する公衆の現実には、カントのモデルに到底及ばなかったことが明らかになった。

(2) リヒターの『抜き書き帳』からは、地方の一青年が『一般ドイツ文庫』を通して啓蒙主義を受容していく過程を読み取ることができる。ボネの転生論は、リヒターのテキストにおける主要モチーフとなるが、その契機になったのも、おそらく『一般ドイツ文庫』である。『一般ドイツ文庫』13巻2号を読んだのは1779年。それから翌年にかけて、ボネ、ラファーター、メンデルスゾーンのテキストから集中的に抜き書きをしている。

(3) ヤコービ『スピノザの学説に関する書簡』が刊行された1785年から、ヤコービ『信念をめぐるデヴィッド・ヒューム』が刊行された1787年3月までに発表された七本の書評を分析し、論争における書評紙の役割を調査した。書評紙は、同時代の多くの読者にとって、論争についての情報源だった。書評記事が、かなり長い直接引用、間接引用で埋められているのは、原著を読むことができない読者を想定してのことであると考えられる。書評記事は、今日の学術的な水準に照らして、画期的な見解が表明されているわけではない。書評者は、ヤコービ、メンデルスゾーンの著書に書かれていることをパラフレーズし、重要だと思われるところに光をあて、簡単なコメントを加えているにすぎない。しかし、書評者が、それぞれの立場からコメントを加えていく過程で、汎神論論争に含まれているいくつかの論点のうち、ヤコービの「信」の概念が争点として浮かび上がってくる。結局、このテーマが、ヤコービのヒューム論に引き継がれていくのである。書評には、個々の書評者の力量を超えた公論としての働きがある。

(4) 汎神論論争の当事者も、書評紙の影響力を意識していた。汎神論論争が、難解な内容にもかかわらず、広い読者層の関心を喚起したのは、レッシングがスピノザ主義者だったというスキャンダルが論争の契機になっていたためでもある。書評者はほとんどの場合、レッシングについては報告にとどめ、もっぱら形而上学的な問題について論じている。しかしもう一方で、地方紙には、スキャンダルを書き立てる広告も掲載されていた。書評に代表される公論が、読者一般の現実的な関心にかならずしも一致していなかったことが推察される。

(5) リヒターの『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』第一版(1809)は、雑誌のスタイルをモデルにして、個々のテキストが統合されることなく集められた「テキスト群」になっている。「作品」を意識して再構成された第二版(1822)は「テキスト群」と「作品」の中間ともいうべきスタイルで、物語からの脱線を繰り返すリヒターの小説の特性と重なる。アクチュアルな出来事への強い関心、読者への呼びかけは、リヒターの小説と新聞・雑誌記事との接点を示している。

(6) 『カッツェンベルガー博士の温泉旅行』第一版の執筆時期は、ナポレオン戦争期にあっている。リヒターは『ドイツへの平和の説教』(1808)、『ドイツの薄明かり』(1808)といったドイツの現状についての見解を読者公衆に直接訴える記事を書いている。ハンブルクの出版者ペルテス(Friedrich Christoph Perthes)との往復書簡からは、文学者・知識人の公共性への関与がメンデルスゾーンの時代から変わってしまっていることを読み取ることができる。このテーマについては、現在、論文を執筆している。

(7) 2019年夏のマールバハでの調査で、出版者コッタ(Johann Friedrich Cotta)の資料集に、リヒター、リヒターの家族との手紙が残されていることを確認していた。コッタから出た『朝刊新聞』との関係、さらに、リヒターの没後に続く全集編纂について、出版者サイドからの研究が期待されたが、新型コロナウィルス感染状況について見通しがたたず、断念した。

(8) 初期ロマン派は、文学史的には、ヴァイマルの古典主義者と対比して、イエナで活躍した一世代若い詩人、批評家とされている。しかし、新聞・雑誌という観点に立つと、初期ロマン派とは『アテネウム』誌(1798-1800)周辺の若き知識人たちであり、同じイエナを中心とする『一般学芸新聞』の対抗勢力ということになる。『一般文学新聞』編者の一人であるシュッツ(Christian Gottfried Schuetz)はカント派で、『一般文学新聞』は、カント、カント哲学と強く結びついていた。人文科学、自然科学の全分野を対象に書評を手がけている。後年、エルシュ(Johann Samuel Ersch)は、1785年から1800年までの書評を分類・整理して、『一般文献一覧』(『一般学芸新聞』編集部で発行)にまとめているが、このような体系化は、「一般」を謳う書評誌の目指すところでもあった。対して、『アテネウム』には「断章」が寄稿された。本研究では、ノヴァーリスの『一般草稿』を手がかりに、初期ロマン派の企図を解明する予定だったが、論文にまとめることができなかった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 亀井 一	4. 巻 70
2. 論文標題 信仰と知とスキャンダル ―汎神論論争と同時代の書評紙―	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要. 人文社会科学・自然科学	6. 最初と最後の頁 173～186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32287/TD00032220	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1. 著者名 亀井 一	4. 巻 68
2. 論文標題 ラファーター＝メンデルスゾーン論争について ―ドイツ啓蒙主義時代の公衆を視野に入れての試論―	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要. 人文社会科学・自然科学	6. 最初と最後の頁 7-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32287/TD00031558	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 ―

1. 著者名 亀井 一	4. 巻 65
2. 論文標題 作品か、テキスト群か？ ―ジャン・パウル「カッツェンベルガー＝テキスト群」をめぐる考察―	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ドイツ文学論攷	6. 最初と最後の頁 29-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 亀井 一	
2. 発表標題 信仰と知とスキャンダル ―汎神論論争と同時代の書評紙―	
3. 学会等名 日本ヘルダー学会	
4. 発表年 2020年	

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

新聞・雑誌を通して1800年前後のドイツ文学の公共圏への関与を明らかにする試み
http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kamei/medien_1800.html

1800年前後のドイツ社会における 公共性・メディア・大学
大阪教育大学令和元年度オープンキャンパス研究紹介コーナーにおけるポスター発表
https://osaka-kyoiku.ac.jp/Portals/0/resources/_file/renkei/kenkyo/seika/r01_1a/15.pdf

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------